座談会

平成１３年１月１９日実施
横浜駅前某所

出席者	細田　　仁（昭和５２年卒　司会）	森下　一夫（昭和５４年卒　現監督）
	諏訪　隆博（平成３年卒　前コーチ）	鈴木　浩樹（平成８年卒）
	大越　　岳（平成１０年卒）	川野　武久（平成１０年卒）
	手島　洋一（平成１１年卒）	岩部　直子（平成１３年卒）
	金丸　　敦（平成１４年卒）	三壁　敏隆（平成１４年卒）

上記の日程・出席者により、座談会を実施した。
６０周年記念誌の編集方針である「この１０年間の当部の状況を、当事者及び監督コーチに語ってもらい、問題点をクリアにし、解決策を導き出す！」との極めて前向きな考えで実施したが、杯を重ねるごとに・・・。
いろいろな話題が「出ては消え、消えては現れる」といった纏まりのない会となってしまった。
その中で、時の流れを感じた話題をセレクトしてみた。(文責：細田)

[川野、大越、金丸、三壁]

[川野、大越、金丸、三壁、森下]

[細田、諏訪、岩部、鈴木]

[金丸、三壁、森下]

[森下、細田、諏訪]

[集合写真]

ＡＯ入試そして初の女子主将

岩部（平成１３年卒）は、初のＡＯ入試卒業者であり、女子主将である。

―ＡＯでの受験のきっかけは？―

岩部＞まず顧問の先生から、話がありました。

自分としては、バドミントンをやるなら、実業団でやろうと思っていたし、まして慶應でバドミントンをすることは全くイメージすることもありませんでした。

とりあえず受けてみるだけのつもりが、今日出席している川野さんの小論文指導の甲斐あって（？）また面接時に、阪神大震災の体験とその時にシステムについて考えたいと思ったと話をしたら受けがよく、（この話は就職面接の時も使いました。）合格してしまいました。

慶應のバドミントンは強くないと知っていたので心配だったのですが、顧問の先生に、報告に行くと「慶應は、森下さんが監督しているので大丈夫だ。」と言ってくれました。

―入部してどうでしたか？－

岩部＞入ったときはスパルタでしたねえ。

女子は付け足し的な面もあり、ショックでしたし腹も立ちました。

また、高校に比べて拘束時間が長くちょっと嫌でした。

―よく４年間続きましたね。－

岩部＞２年生になったとき、もうやめられないと思いました。

また、土日にＯＢの方々がたくさんお見えになるのが驚きであり、励みにもなりました。

－レベル的に不満はありませんでしたか？－

岩部＞男子と試合したり、また土日にOBの方と試合したりであんまり感じませんでした。

―女子の主将として苦労した事は？

岩部＞自分のやろうとする練習のメニューが、男子にはどの程度のレベルなのか解らなくて結構悩みましたが、男子女子のトレーニングは別にするとか、男子なりのメニューを考えてもらうとか、して何とかやれました。

問題は、平日練習に来られる人数が少ない時はやりにくかった。
また、「平日の練習はチーム全体のレベルアップを考え、自分のレベルアップについては土日のＯＢとの練習でやる。」と決めて運営していました。

大学の方が、楽だった？

諏訪（平成３年卒）は、高校時代からトップクラスの選手であり、
入部当時、ずば抜けた存在だった。

―諏訪も、岩部同様に、かなり飛び抜けていたけれども、どうでしたか？

諏訪＞１年上の先輩が、強かったので岩部ほどではなかったと思います。
２部の２位なので、ずいぶんやるんだなと感じたと記憶しています。
でも、大学の方が高校時代よりずいぶん楽だった気がします。

―なぜですか？

諏訪＞高校は、授業の前に朝練があったり、先生も結構きびしかったのでとても大変だった。
それと比べると大学は勉強しなくても良かった（笑い）ので楽と感じたのかも。
時間的には、高校の方が短かったですが、大学では、拘束時間よりも自由になる時間が多く、他にやる事もなかったので、楽と感じたのだと思います。
まあ、３年以降平日は自分の練習よりも他の部員のプレイをみて伸ばす事にしていましたし、また高校とちがって監督に監視されなくなって、自分達でやるので楽に感じたのかもしれません。

―自分的にはどうでした？

諏訪＞やはり土日に、ＯＢ特に森下さんがいらっしゃるのが楽しみでした。
思い返すと、リーグ戦前に、いつも１０勝すると宣言して、結局８，９勝で終わってしまい、よくボウズにしていたなあ！
そういうのも、楽しかったですね。

初心者での入部
大変だ！リーグ戦どうしよう

手島（平成１１年卒）は、初心者でしかもほぼ大学２年から入部した。

―手島の、入部のいきさつは？

手島＞私は、大学からバドミントンを始めたんです。
高校３年の時にたまたま、ジャパンオープンを見に行き、その時日本代表の大田竹鼻組とインドネシアの試合を見て、その試合がとても凄くて、特にジャンプスマッシュを打ちたいと思い、是非やろうと思いました。
最初は、サークルでやっていたのですが、上手くならなかったので、高校からの知り合いの岸本君（平成１１年卒）に、体育会の話を聞きました。
大変そうだとは思いましたが、ダメモトで大学１年の２月に入部しました。

実際、何度も「駄目だ。」と思いましたが、上級生が人数も多く強かった（？）ので憧れましたし、自分も徐々に力がついたと実感できたので続ける事ができました。

しかし、厳しい事は厳しく、１年下は女子２人、２年下は男女１人づつを残して、やめてしまいました。

―部員がずいぶん、少なくなってしまったのですね？

森下＞実際、平成１１年卒の代は、リーグ戦をどうしようかと本当に困りました。

実力云々というよりも、とにかく人数がいませんでした。

しかも、平成１２年卒の代は、男子が１人もいなくて・・・。

こういってはなんだが、石田（平成１２年卒）が留年してくれて助かりました。（笑い）

秋のリーグ戦が終わり、平成１１年の代が抜けた後は、春まで全員で９人くらいだったと記憶しています。

そのかわり、コートには、入りっぱなしでした。

手島＞そうですね。ネットを２面しかはらなくても良かった日もありました。

金丸＞今でも、平日はそういう日もあります。

岩部＞土日だと、ＯＢの方が多かったときもありました。

ＳＦＣ（湘南藤沢キャンパス）からの入部

鈴木（平成８年卒）はＳＦＣで、勧誘され入部した。

―鈴木の、入部のいきさつを。

鈴木＞ＳＦＣのオリエンテーションの時、藤沢キャンパスにて珍しいガクランの集団に遭遇した。

それがバドミントンの勧誘でした。

勧誘がなかったとしたら、サークルでバドミントンをするか、他の事をやったと思います。

―その後、授業は藤沢、練習は日吉となかなか大変だったと思いますが？

鈴木＞１年生のころは週に４日ぐらいしか練習に行けませんでした。

また、入部した頃は人数も多くてコートに入れませんでしたし、入れたとしても女子の相手でした。

４年になって、練習に行ける様になり、自己流だったフォームも改善されてかなり伸びたと思います。

―当時の部の状況は？

鈴木＞　常に３部でした。１，２位で入れ替え戦までは進出するのですが、昇格できませんでした。

当時は ３ 複４単でしたので、練習量にものを言わせて全体の底上げによる総合力で何とか３部の上位を確保していたという状況でした。

自分としては、レギュラーになれるかなれないか、早慶戦に出られるか出られないかで、部内で常に競っていたのが良かったと感じています。

塾高出身者！

大越、川野の両君は、最近入部が途絶えている塾高出身である。

―塾高時代から大学との絡みは？

大越＞　当初は、コーチに連れられて練習に参加しましたが、そのうち自主的に出るようになりました。

最初は、当然の事ですが大学生は自分より上手な人ばかりなので、思い切り気を使い「嫌だなあ」と思っていましたが、自分が伸びて行くのが実感できましたので徐々に参加するのが楽しみになりました。

―塾高生を大学で練習させるのは良い事ですね。

大越＞　塾高の強化に効果がありますし、大学進学後体育会に入部するのが、当たり前と思うようになります。

川野＞　かといって、それが強制的では反発されたりして、逆効果かもしれません。

少なくとも、われわれは自主的に参加していました。

大学は、高校生からするとピリピリしていて、楽しむどころか「下手なプレイは出来ない」と感じさせるプレッシャーもあるので、飛び込もうと言う気にさせるには壁があると思います。

―その壁を取り除いた様な事がありましたか？

大越＞　じつは、鈴木さんの代（平成８年卒）が２年生の時、我々高校生とチーム戦をやらされ、勝ったり負けたりしていました。

大学生は負けると当然罰則でしたので、結構真剣勝負になりましたが、この緊張感もまた楽しいと感じるようになりました。

―体育会に入る事に抵抗はありましたか？

川野＞　当然と思っていましたので、全くありませんでした。

大越＞　他の選択肢もうかびましたが、抵抗はありませんでした。

平成 14 年卒業生（座談会開催時点では現役４年）

金丸、三壁の両君が参加してくれました。

―4 年間を振り返って下さい。

金丸＞　入った頃から、主務と目されていて、2 年生の頃から雑多な用事に追われていて、その点では辛かったです。

練習そのものは、別に辛いと思った事はなく、ただバドミントンに集中する時期がなかったので、もっとプレイヤーとしてバドミントンをやりたかったと感じています。

三壁＞　選手としては、恵まれた環境にいたと思います。

1 年生からリーグ戦に出られましたし､2 年生からは大事な場面で自分の番になり、しかも勝つ事が出来ました。
本当に状況が良く、楽しく部生活を送りました。

体育会バドミントン部の抱える問題点について

―「体育会らしさ」の一つに、規律とかモラルがありますがその点について。

川野＞　乱れがちと感じています。
厳しくする事も必要と思います。

諏訪＞　自分が目下の位置にいる時には､片付けなど｢自分の当然の仕事｣としてやる事は、最低限のマナーと思います。それを解らせることは必要だと思います。

岩部＞　プレイヤーとしての実力と、下級生としての仕事をする事は全く関係ないのに、楽する人もいました。それを是正してやる事も大切です。

―体育会は訓練の場でしょうか？

諏訪＞　そういった面もあるとは思いますが、強制すべき問題とは違うと思います。
しかしながら、最低限の社会的マナーを身につけるには良い所だと思います。

―ここ数年、入部者も少ないですが、退部者も結構いると聞いています。
辞めてしまうのはどういう状況なのでしょうか？

大越＞　他に目移りする事が多いと言うこともあるでしょうし、そちらの方が魅力的と映るのでしょう。

鈴木＞　でも、うちの部に関して言えば､いわゆるバトミントン馬鹿になる事を求められるわけでもなく、良い意味で二股三股をかける事も可能ではないでしょうか？

諏訪＞　入部してくる人は、「バドミントン好き」あるいは「スポーツ好き」が前提であるはずです｡辞めたいと思った時に｢バドミントンは個人競技だから迷惑をかけない｣との思いと、｢部としての組織の中での自分の占める位置の認識｣との葛藤がなかったり、あっても弱い人が辞めていってしまうと思います。
ある程度、責任ある役割をどうもたせるかによるのではないでしょうか。

4年間の部生活はどうだったのか？

諏訪＞別段、苦しいとは思わなかったし、やりたいことをやりました。
行きたいところにも、いきましたしね。

鈴木＞辛いとは感じませんでした。何となく楽しかった。
しかし、１，２年生の頃もっともっと練習すべきでした。

大越＞１，２年生の頃は責任も無く楽しかったです。
３，４年生では責任も出てきて悩みもしましたが、それも良い想い出です。
ただ、インカレには出たかったとの悔いもあります。

学生に戻って、思い切りバドミントンをやりたいです。

川野＞ケガをして、長い期間プレイ出来ませんでした。
それも辛いと思った事もありませんが、むしろ其の分までもっとプレイしたかったです。

手島＞どちらかと言えば、苦しかったし辛かった。
でも１日の練習が終わった後は楽しい毎日だったし、4 年間が終わった時には本当に楽しい 4 年間だったと実感しました。

岩部＞嫌な事も、苦しいこともいろいろありましたが、いまは全部本当に良い想い出です。

森下＞自分は、楽天家で、更に自分をいじめるのが好きで、其の時は苦しかったかもしれ、ないけれど、強くなる事に喜びを感じていました。
部員が 30 人ほどいて、最初は下から 5 番目位だったので、追い越したい目標がたくさんいて頑張れた。
そういう事が、役に立っていると思います。

細田＞プレイヤーとしては何にも無い 4 年間だったけれども、一生付き合う二度と得がたい仲間を 7 人も授かった事。これが私のバドミントン部での最大の宝物です。
部を辞めさせられそうになった事など、精神的に辛い事もあったけれども、良い学生生活を送らせて頂いたと感謝しております。

今後の体育会バドミントン部へのささやかな提言

１　2部復帰に向けて

- **入部者数を増やそう。**
- **２複３単のリーグ戦を前提とするなら、AO入試を活用し、その為の勧誘と受験指導をしよう。**
- **塾高・女子高・さらには普通部中等部のトータルな強化を図ろう。**

２　現役へのメッセージ

- **時間を有効に使って下さい。**
- **外部へどしどし他流試合に行って下さい。**
- **慶應の練習の基本は「質より量」をお忘れなく。**